

北北西（霞が関）に針路を取れ

福岡県本部／大牟田市職員労働組合

1. 地域発信のノーマライゼーション

(1) 小学校は地域の宝

明けましておめでとうございます。

広大君のお手紙おバアチャンは嬉しくて何回も読まして戴きました

五年生一同で餅米作り大変なことだったでせう

広大君達が造った餅は大事に元旦迄なほして元旦におぞう

にとして五年生の皆様有難うございますと感謝して頂かせてもらい今年は好い正月だったと喜んでます

おばあちゃんは76才ですが子供も孫も居なくて広大君のやさしい手紙本当に有難うございました広大君も学校が初まつたら一生懸命勉強していたわりの心を持ちやさしい広大君で居ることを祈っています

おばあちゃんより

広大君へ

おばあちゃんも三池小学校に一年生より六年迄学ばせて戴き懐かしい思いです

小学校教師とPTA有志で米米クラブを結成、小学校近くの休耕田(2反)を無償で借り受けこどもたちと一緒にもち米作りに挑戦。いじめが社会的問題になっているなか、学校や家庭だけでは支えきれなくなった問題に対し、学校を地域づくりの拠点として地域に開放し、ともにささえあっていこうという取り組み。地域の爺ちゃん婆ちゃんに農業ボランティアを呼び掛け、教師父母の20人からなる農業ボランティアが結成された。半年に及ぶ苦闘の末、収穫されたもち米は冬休み前に5年生のこどもたち全員と一緒にもちつき大会を実施。終業式のあと5年生の児童と小学校職員、父母、民生委員で手分けして、ついた餅と5年生のこど

もたちが学校での出来事やいたわり励ましを書いた手紙を持って校区内の360人の独居老人宅を訪問した。その後連日お年寄りから学校へのお礼の電話や手紙が寄せられた。それらは教室で先生から子供たちに伝えられている。二年目には老人会が自主的に参加、輪が広がる。私たちは一言で少子高齢社会という。しかし、2反の休耕田での小さな取り組みは自分たちの住んでいる地域の在り様ということを、それぞれにあらためて考えさせてくれた。自分たちの住んでいる地域に、どんな暮らしがあるのか知らずに、また、人々の交流がない地域社会は存続しえない。

(2) もう黙ってはおれんシルバーパワー全開

「ふれ愛桜町」の世話人さんは現在16人、その中の代表世話人の6人活動は、特にからだの不自由な人を対象に担当を決め、ふれ愛日誌を持って日常的に目配り気配り。空気のような「見守り運動」が心がけられている。もしも誰かが困ったとき、世話人が飛んできて一緒に悩み、考え解決のために汗を流す自分たちのためのネットワークづくりである。

「自分たちの町から孤独死なんて絶対ださんぞ」を目標に、幼なじみ顔染みによる向こう三軒両隣大作戦と銘打って、「シワの中から知恵を出せ手を出せ足出せ口も出せ」を合い言葉に活動している。個人の能力に応じた任意の自主参加が原則でボランティア活動が基本。「してあげた」「していただいた」という関係ではなく共に楽しみ悩みながら生きる共生の輪づくり。特に「わたしゃ、足の悪かし迷惑かけるけん遠慮しとくばい」というお年寄り、あまり外にでる機会のない人に声をかけている。

年三回、校区在住の組合員の協力をえて、公民館や校区の老健施設・小学校の体育館を借りてのデイサービスへ発展。健康管理の話や演芸大会、時には桜の花のしたで開かれます。地域の一人の老人の活動を地域在住の市会議員（市職労政治局員）の奔走で老人たちの手によるふれ愛運動に発展させ、今、校区全体に広がりはじめています。

労働組合も地域自治研活動と位置付け校区在住の多くの組合員・保健婦・ヘルパーによる側面からの支援をしている。

2. 行政という専門職の壁

(1) 市内ネットワークづくり

人口14.5万人。昨年市の基幹産業であった炭坑が閉山し新しい町づくりが求められている。高齢化率22%をこえた大牟田では高齢者対策の一環として高齢者の総合窓口一本化を図るため高齢サービス課が新設された。これを契機に市職労としても高齢者障害者の取り組みを強化する。自治研の取り組みのひとつとして、これまで「ふれ愛桜町」や「三池小学校農園」に関わってくれた組合員に働き掛け高齢者対策プロジェクトを発足させた。参加メンバーは、保健婦、ヘルパー、理学療法士、建設、福祉関連職場。いずれも、日常業務では高齢者と関わっていながら、お互い他の職種が何をしているのか十分知らないまま自分の業務範囲の対応にとどまらざるをえない状況にあった。

そこで最初の切り口は、それぞれの業務内容や、業務上の悩み、この集まりで自分がやりたいことなどを話し合い参加メンバーの交流を中心に進めた。しかし専門職集団の壁は厚く、それぞれ自分たちの職域からなかなか抜け出れない。それ故抱えている悩みも大きいことがわかってきた。

保健婦・ヘルパーの具体事例への意見交換、民間福祉職員と一緒に福岡の宅老所「よりあい」の見学や住宅リフォームの先進地視察を行う。

これらを積み重ねることにより高齢者障害者への取り組みは、他職種との役割分担論ではなく、その実態を共有しながら理解を深め、互いに連携を図ることが土台であるとの認識に立つことが出来た。

どのように共有していくかの具体的な取り組みの第1段階として保健婦・ヘルパーから出された具体的事例に対し、本人と家族の理解を得た6軒へメンバーが保健婦・ヘルパーと同行訪問してその実情を把握することにした。

「はじめにかかわりありき」をテーマとして、現場関係者相互の緊密な関係と本来の役割が明確になってきた。

訪問の内容は機関誌に自治研活動報告としてシリーズで掲載、広く組合員に紹介しながら運動的な位置付けを図ってきた。

3. 生きる権利の保障

(1) 同行訪問報告ばあちゃん転んだ

同行訪問の取り組みが始まってまもなく、プロジェクトメンバーの家族（83歳のばあちゃん）が部屋で転んで大腿骨を骨折。医師からは「退院後自宅で暮らすのは無理だろう」ということで施設入所を勧められる。最悪の場合はどちらかが勤めを辞めてでも家族は在宅を希望。高齢者プロジェクトの中で協議が重ねられ家族や本人へのアドバイスとともに、メンバーのリハビリ士が家族の希望に添ってリハビリを進め、同じくメンバーの建築士が住宅改造をしてくれた。

手術後早期リハビリから退院、家屋改造、デイケアと途切れる事無くアプローチできた例。現在、週2回デイケアに通い、家では洗濯物の取り入れ、あ茶わん洗い。土日は家族と近所を散歩（途中で休憩が長い）したり買物にいったり（10分で行ける所だが1時間くらいかかる）となかなか忙しい。

入院する前はほとんど寝ていることが多く、食事も一人で食べていた。また、物忘れも進み失禁の回数も増えていた。家族は心配しながらも年だからと一方的に受け入れ対応していた。今は必ず一緒に食事をするのがお互い当たり前となり、入院前は毎日のようにあった失禁も今では全くない。

ばあちゃんにとっては、今回のことをきっかけにいろいろな人が関わることによって自分が生きてくることの実感と、我が家に自分が安心してすみ続けることが出来る確認が出来たのだろう。また家族はいろんな人との関わりの中で親というよりも一人の生きる権利の保障というものを実感したようだ。

この例は家族が仕事の関係で情報を持っていたことと、たまたま関わってくれる仲間がいた結果である。しかしこのようなチームアプローチが本来あるべき姿ではないだろうか。わずか6例ではあったがその対応の根底は三池小学校、ふれ愛桜町と同じで、地域の中で包み込んでいける住民主体の地域づくりとネットワークづくりの重要性、それに対する行政支援の必要性を同行訪問を通じてお互いに共有することが出来た。何よりも大切なのは一人ひとりの生きる権利を皆がどう保障し関わっていくかだろう。

4. 実践の場づくり

(1) 宅老所づくりの具体的な取り組み

ばあちゃん転んだの実践と評価はメンバーに自分たちがやっていることの実感を抱かせた。その実感はさらに実践の場づくりと発展していく。「よりあい」と交流を深めるうちにメンバーの中に、「大牟田にも造ろう」という気持ちが湧いてくる。生活の匂いのする町中に宅老所として改築させてくれる借家と、給料なんてでないかもしれないがお年寄りを好きだからやってみたいというスタッフを探しはじめる。

借家は「あんたらに任せる」といってくれるところが見つかったがスタッフのほうはなかなか決まらない。心当たりの人は、やりたい気持ちは一杯あるが形が見えてないことや給料の保障がないところで踏み切れない。高齢者メンバーの法事に呼ばれてそこで出会った人が「私やります」といってくれる。

改築工事は障害者ボランティアをしている工務店が引き受けてくれる。現場を見た工務店主はするともしないとも言わないで帰り、1週間後に承諾の電話があった。通常の工事依頼ではないのでお金が入らないかもしれない、自分の貯金をはたいてでも引き受けることが出来るか奥さんとずいぶん相談したそうだ。

この二つの出来事は雲を掴むような話から具体化に向けて大きく一步踏み出すこととなる。

(2) 組織内に宅老所支援体制確立

市職労においては労働組合が「宅老所運営という事業に関わりきれぬのか」「組織化されていない市民への運動展開が出来るのか」など組合内での厳しい議論をへて、宅老所設立支援の方針化を図り推進体制をとった。

組合の方針をうけ、高齢者プロジェクトを中心としてこれまで話をしてきた人たちに呼び掛けとりあえず30人で「宅老所設立準備会」を結成、自治研部に仮事務局を設置した。保健・医療・福祉住宅改造研究グループを中心に組織外から生協・工務店・障害者施設職員・運営スタッフなど各々個人の立場で参加、方針や仲間づくり資金活動など、実現に向けて毎日のように協議が繰り返され次々と難題に挑戦していく。

(3) つくる会の結成と宅老所の開所

設立準備委員会の30人を核にして「大牟田にも宅老所をつくる会」を結成。改築工事の手伝いや資金確保・賛同者募りの活動を本格的に始める。改築工事の手始めは家の一部解体から。暮れの30日、12人で解体の手伝い、餅つきの杵に替えて木槌で泥かべを突き崩す。資金確保の一部として1,200本の羊糞を2日で売り捌き、口づてに一人ひとり訪ね募金をつのる。

開所の目処が立ち、5月に「つくる会」主催で、これまでに会員になってくれた200人を対象に「地域で暮らしていける老後を考える集い」を開催。宅老所「よりあい」から「よりあいの歩み」の講演、「つくる会」からの経過報告と支援要請、勤労者劇団による「楢山節孝」の上演。よりあいの見学から3年、やっと6月に宅老所の開所、「つくる会」の事務局も宅老所内に移す。地域での開所式は地域を主体にとささやかに行う。

「駐車場を使っていいですよ」と隣のパン屋さん。「おばあちゃんたちの髪を切りにいってあげますよ」と向かいの美容院。「庭づくりを手伝いますよ」と隣の住民。「なにか必要なことがあったら言ってください」とする近くの開業医さん。校区の民生委員や公民館長を訪ね、内容の説明と支援のお願い。宅老所のすぐとなりの小学校の校長先生たちが見学にこられた。「遠慮なく学校へ散歩にきてください」と嬉しい励まし。建物の出来上がりとともに地域とのつながりが少しづつ見えてきた。

当日手伝いにきてくれた地域の人から私やりますと言う人があらわれ、なんとか専任のスタッフ3名が揃う。1週間後、相談があった3人の利用者を受け入れ、お互い試行錯誤からスタートした。

地区公民館からの依頼で宅老所近況報告。社協のボランティアの会との交流。桜町・吉野・宅老所との合同勉強会。宅老所での出前介護教室の開催。市民とのネットワークづくりが動きだした。運営は資金確保やボランティアの支えなど厳しいことばかり。しかし逆にそれらは幅広い仲間づくりやかかわってくれる人、一人ひとりの役割を生じさせることにつながっている。

5. 自治研活動の裾野を広げる

いじめ問題への対応の取り組みがきっかけとなって学校を拠点とした地域づくり。地域老人の切実な取り組みがきっかけとなった老人たちの手による地域づくり。これらを受けとめ自治研のネットワークづくりへとつなげ、さらに実践の場として宅老所開設へ。いずれの取り組みも継続が大きな課題。組織基盤のもろさ。財源基盤の弱さがつきまとう。また、地域は縦割りではなく暮らしという総合性をもっている。行政としての役割がここにある。

地域福祉の構築にむかって住民と行政がどう責任を分かち合い、どう協働していくか。宅老所・桜町ふれ愛・三池小農園はまさに自治研の命題である「共に」の場づくりでもある。これらの発信を受けとめ実践することが少子高齢社会を向かえ個人の在り様、地域の在り様、行政の在り様の構築につながる。

自治研活動をもう一步踏み出し、住民のニーズを、地域のニーズを生活の場という視点からとらえ、地域福祉社会をどうつくり上げていくか、私たち一人ひとりが真剣に考え、地域住民や市民団体の意見や提言が活かされるような仕組みづくりを自治体から発信しよう。